

## Theta 構造の始まり — 「ジェスチャー-手話」比較研究が示すもの 浅田 裕子 (昭和女子大学)

人間言語では、二つの要素 X,Y が統辞部門で外的併合することによりつくられた {X,Y} が、意味解釈のために項-述部構造を提供しなければならない。この条件に関する理論は Theta 理論とよばれ、(1) が想定されている (Chomsky (in press, to appear))。

(1) Theta 理論は、言語固有条件 (language-specific conditions) の一つである。もし、(1) に沿い、Theta 理論が人間言語への進化の過程で “利用可能になった (Chomsky, in press)” のであれば、ジェスチャーのような非言語表現形式では、Theta 構造を提供しなければならないという条件は必ずしも適用されないことを予測する。一方、付加構造のように、二つの要素間に Theta role の付与関係がない構造(以下、非 Theta 構造)は、Theta 理論が関与しないため、ジェスチャーも言語と同様な特性を示す可能性があることを予測する。本研究プロジェクトの目的は、ジェスチャーと手話言語の表出形態の比較調査を通して、これらの予測を検証し、仮説 (1) の妥当性を判断することである。

ジェスチャーと手話言語はともに視覚身体モダリティにおける表現形式であるが、二つの形式は連続的につながっているという立場 (McNeill 1992, 2000, Kendon 2008 等) と、手話言語にはジェスチャーにはない人間言語の特性があり、それらを区別する実証的証拠があると主張する立場 (Goldin-Meadow & Brentari 2017 等) がある。近年、後者のアプローチの下、ジェスチャーと手話言語の表現特性の比較分析を通して人間言語の特性をあぶりだそうという研究が増えている (Culbertson et al. 2020, Slonimska et al. 2022, Do et al. 2022 等)。上で述べた Theta 構造・非 Theta 構造の対比に関連して興味深いのは、これらの研究結果が、仮説 (1) と整合しているということである。ジェスチャーでは、他動詞と目的語から成る動詞句—すなわち Theta 構造—に対応する事象と、形容詞と名詞から成る名詞句—すなわち非 Theta 構造—に対応する事象は異なる表出特性をもつ。

これらの理論的・実証的背景の下、本研究は、日本手話母語話者(ろう者)と日本語母語話者、英語母語話者(どちらも聴者)の三つのグループを対象に、複数の Theta roles の付与関係を含む原因-結果構文(例:女が男を銃で撃ち、男が死んだ)に対応する事象を手話とジェスチャーで表出させる調査を開始した。現在はプロジェクトの初期段階にあり、本発表では、プロジェクトの調査設計と具体的な調査方法を紹介し、今後の見通しを議論する。

### 主要引用文献

- Slonimska, A., Özyürek, A., & Capirci, O. 2022. Simultaneity as an emergent property of efficient communication in language: A comparison of silent gesture and sign language. *Cognitive Science* 46(5): e13133.
- Do, M.L., Kirby, S. & Goldin-Meadow, S. 2022. Regularization of Word Order in the Verb Phrase differs from the Noun Phrase: Evidence from an online silent gesture perception paradigm. *Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society* 44.